



テニス 大会レポート

全国高等学校体育連盟テニス専門部常任委員 岡本直哉

連日パリオリンピックと猛暑のニュースが伝えられる中、大分県大分市において令和6年8月1日から8月8日まで北部九州総体テニス競技が行われた。

【開会式】8月1日(木)15時よりJ:COM ホルトホール大分

全国から集まった選手監督が参加し、大分県高等学校体育連盟テニス専門部徳光省吾部長の開会宣言の後、前年度優勝校・優勝者からの優勝旗・優勝杯返還及びレプリカ贈呈が行われた。次に全国高等学校体育連盟テニス専門部黒岩睦雄部長、日本テニス協会馬場宏之副会長、足立信也大分市長、大分県テニス協会小手川励人会長がそれぞれの思いを言葉に乗せて参加者へ届け、大分舞鶴高等学校安部樹さんが地元高校生を代表して歓迎の言葉を述べた。その後の選手宣誓では大分舞鶴高校テニス部男子主将松永朔太郎選手と福徳学院高校テニス部女子主将の岡崎咲菜選手が大会スローガン「駆け上がれ夢の舞台へ 燃え上がれ若人の魂」を踏まえ、これまで支えてくれた人たちへの感謝と、自分たちが全力でプレーすることで恩返しをすることを堂々と宣言した。





【団体戦】

8月2日(金) 1・2回戦 1セット 会場:レゾナックテニスコート・豊後企画テニスコート

8月3日(土) 3回戦 1セット 準々決勝 8ゲームズプロセット 会場:レゾナックテニスコート

8月4日(日) 準決勝・決勝 8ゲームズプロセット 会場:レゾナックテニスコート

男子ベスト8には相生学院(兵庫)、大分舞鶴(大分)、日大三(東京)、四日市工(三重)、柳川(福岡)、東山(京都)、新田(愛媛)、湘南工大附(神奈川)が勝ち上がった。準々決勝では相生学院が地元大分舞鶴に、日大三がシード校を次々と撃破した勢いそのまま前年優勝の四日市工に、柳川は東山に、湘南工大附は新田にそれぞれ勝利し、翌日の準決勝へと駒を進めた。準決勝は3面進行で行われ、相生学院―日大三は相生学院がS1を日大三がDを取り、勝負はS2にかかった。激しいストローク戦を制したのは相生学院。2年連続の決勝進出を決めた。湘南工大附―柳川はシングルス2本を湘南工大附が取り、2―1で決勝を戦う権利を得た。決勝はS1が湘南工大附、S2を相生学院が取り合う展開となり、チームの勝敗はダブルスにかかった。お互いに緩急を織り交ぜた展開だったが、一歩抜けだした湘南工大附が最後はポーチを決め11年ぶりの優勝を果たした。



女子ベスト8は大商学園(大阪)、岡山学芸館(岡山)、山陽女学園(広島)、早稲田実業(東京)、四日市商(三重)、仁愛女子(福井)、野田学園(山口)、相生学院(兵庫)の8校。準々決勝は岡山学芸館が第1シードの大商学園に、山陽女学園が早稲田実業に、仁愛女子が四日市商に、野田学園が前年優勝の相生学院に勝ち切った。翌日の準決勝、岡山学芸館―山陽女学園はS2を山陽女学園が、S1は岡山学芸館を取り合い、勝負はダブルスへ。一進一退の攻防の中、鋭いサービスを武器に岡山学芸館が勝利をおさめた。もう一つの準決勝は、野田学園が仁愛女子をやぶった。決勝はS1が野田学園、S2は岡山学芸館が取り、優勝の行方はダブルスへかかった。息詰まる熱戦だったが、岡山学芸館が4度目のマッチポイントを取り優勝を決めた。



岡山学芸館の優勝は3年ぶり。この3年間、団体での全国総体出場は叶わず悔しい思いをしてきた。その思いを全てをぶつけてつかんだ歓喜の瞬間だった。

表彰式では日本テニス協会植田実様が選手・監督の健闘を称えとともに「自分も50年前に高校総体の舞台に立った。試合は勝っても負けても成長のチャンス。」という言葉で挨拶を締めくくった。



【個人戦】

8月5日(月)男子シングルス1～4回戦 女子ダブルス1回戦～準々決勝

会場:レゾナックテニスコート・豊後企画テニスコート

8月6日(火)男子ダブルス1回戦～準々決勝 女子シングルス1回戦～4回戦

会場:レゾナックテニスコート・豊後企画テニスコート

8月7日(水)男子シングルス4回戦の一部、準々決勝 ダブルス準々決勝の一部、準決勝

女子シングルス4回戦の一部、準々決勝 ダブルス準々決勝の一部、準決勝

会場:レゾナックテニスコート

8月8日(木)男女シングルス準決勝・決勝 男女ダブルス決勝

会場:レゾナックテニスコート

シングルス 1・2回戦 1セットマッチ 3回戦・準々決勝・準決勝 8ゲームズプロセット

決勝 3セットマッチ(最終セットは10ポイントのマッチタイブレーク方式)

ダブルス 1回戦～準決勝 8ゲームズプロセット(ノーアドバンテージ方式)

決勝 3セットマッチ(最終セットは10ポイントのマッチタイブレーク方式)

〈男子シングルス〉

地元の大声援を受けて第1シードを破った渡邊脩真(大分舞鶴)は、ノーシードから勝ち上がった藤崎幹大(早稲田本庄)にも勝利しベスト4へと進んだ。こちらも大分県代表、松永朔太郎(大分舞鶴)が中前孝至朗(神村学園山梨)に勝ち渡邊の待つ準決勝へ。お互い手の内を知り尽くしている同校対決は8―1で松永に軍配が上がった。もう一つの準決勝は、前田透空(相生学院)に勝利した逸崎獅王(相生学院)と新實剛生(柳川)を接戦の末振り切った島笙太(関西)の対戦となった。的確な配球で相手を苦しめた逸崎が8―4で勝利し、決勝へ進出した。緊迫した雰囲気で行われた決勝ファーストセットは終盤で逸崎が抜け出し6―4で

先取する。続くセカンドセットは、攻撃の精度が上がった松永が6-2で取り返し、決着は最終セットへ。10ポイント先取のタイブレークを制したのは松永。その時会場は一つになり歓喜につつまれた。大会のために献身的に努力を重ねた大分県関係者の努力が報われた瞬間だった。



〈女子シングルス〉

第1シードに勝利した上方璃咲(野田学園)が水口由貴(沖縄尚学)を退けベスト4へ進出した。成田百那(名経大市邨)はプレースメントを重視したテニスで、粘る後藤セ心(大商学園)に勝利。二人が対戦した準決勝はレベルの高いストローク戦となった。角度のあるクロスとストレートを武器に相手を走らせる上方の攻撃を耐え忍ぶ成田。最後は接戦をものに成田が決勝進出の権利を得た。もう一つの準決勝は長いストローク戦を制し、南風音(松商学園)を振り切った林妃鞠(四日市商)と第2シードに勝った前田樹花(東葉)との関東勢対決に勝利した野口紗枝(法政二)との対戦となった。ここまで通算4ゲームしか落としていない野口が勢いを保ったまま決勝進出を決めた。決勝では鋭いストロークで成田を左右に走らせた野口がファーストセットを先取。セカンドセットの苦しい場面も強気のプレーを貫き、ストレートで優勝を決めた。



〈男子ダブルス〉

ベスト4には第1シード若松泰地・前田透空(相生学院)、混戦を抜け出した中前孝至朗・岡橋優希(神村学園山梨)、第3シード木村一翔・島笙太(関税)、近畿総体チャンピオンの小夏秀太・津崎優(関学)が残った。実力伯仲の中、決勝進出を決めたのは中前・岡橋と木村・島だった。翌日の決勝戦は、圧倒的な打力を誇る



木村・島に対して緩急を織り交ぜながら仕掛けていく中前・岡橋という構図になった。サービスキープが続く中、タイブレークでファーストセットを制したのは木村・島。セカンドセットに入るとさらに強烈なショットを相手コートに打ち込み6-2でこのセットも奪い、優勝を決め、勝利の雄たけびをあげた。



〈女子ダブルス〉

第1シードを倒した朝倉優奈・稲場らん(相生学院)と昨年優勝者が残る、水口由貴・井出葵(沖縄尚学)の対戦は8-5で水口・井出が、もう一つの準決勝は第3シード網田永遠希・川崎このは(野田学園)がタイブレークの末、第2シードの岸本聖奈・中島莉良(岡山学芸館)を振り切って決勝進出を決めた。翌日の決勝戦、リードしたのは網田・川崎。安定したストロークで着実に得点を重ねてファーストセットを奪う。セカンドセットは水口・井出がセットポイントを抑えるも取り切れずタイブレークへ。激しい攻防の末に勝ったのは網田・川崎。ストレートでの戴冠だった。



【結びに】

7日間にわたる激闘の末、今年の全国総体は幕を閉じた。ヒートルール適用や雷での中断など不測の事態があったにもかかわらず集中力を切らさなかった選手達の逞しさが印象的だった。

またそれだけではなく、長く準備に携わってきた大分県高体連テニス専門部、張りのある声で審判をした大分県の高校テニス部員達、笑顔と美しい花で全国から来た方々を迎えた補助員諸君、競技が円滑に進むよう協力していただいた大分市実行委員会と大分県テニス協会のみなさん。この大会に関わった一人ひとりが、二度とないこの時を最高のものにしようと献身的に力を尽くしてくれたおかげで素晴らしい大会になった。

来年の全国総体テニス競技は広島県福山市と尾道市での開催予定である。スローガン「開け未来の扉 中国総体2025 輝け君の青春 刻め努力の軌跡」の通り、高校生アスリートにとって思い出深い大会となることを心から祈念する。



